

源氏物語新見

門前眞一

源氏物語新見

門前眞一

門前眞一教授還曆記念會刊

源氏物語新見

1965年3月25日印刷

1965年3月30日發行

著者 門前眞一

發行者 門前眞一教授還曆記念會 天理市仙之内町天理大學國文學研究室内

印刷者 大寶印刷株式會社 京都市南區東九條西岩本町8

非賣品

刊行のことば

門前教授は、昨年、華甲の壽を迎へられた。この時に當つて、多年の研究をまとめた本書が學界に贈られることは、その意義少くはない。

教授は、吉澤義則博士に師事して、夙に源氏物語に關心を寄せてをられた。もつとも、その研究分野は、それ以外にも、平家物語、古事記、萬葉集、和譯聖書、文法、國語學などにもわたつて、多彩な學問的成果を擧げてをられる。

その學風の基調は、國語學上の確實な識見からする、小さな一つの語彙の解釋をもおろそかにせられないところの、本文の理解の見事さにある。その半面、透徹した論理と若若しい情熱をもつて、作品の根本理念を執拗なまでに深く掘り下げて、追求して行かれる態度は、人を魅了せずには

おかないものがある。この特色が最もよく現はれてゐるのが源氏物語論である。

教授の還暦記念の爲に、吾吾知友門下生相謀つて、源氏物語に關する既發表の論文をまとめて刊行することを計劃した。教授は、これを受け入れられて、爲事を始められたが、その結果、全面的な改訂、増補が行はれて、内容は殆ど新しく書下ろした程度に、面目を一新するものとなつた。今、本書の公刊に際し、卷頭に聊か祝意を述べ、併せて、今後の御健康を祈る次第である。

昭和四十年三月

門前眞一教授還暦記念會

題 言 數 則

源氏物語の主題と構成に關する論文五章を新しく草してこの書を成した。内容は、一讀直ちに明らかであるやうに、源氏學草創以來の歴代の耆宿、先學の幾多の著述、論考に負ふところ極めて多大である。

とり上げた問題は源氏學の狭い一局部のものに過ぎない。けれども貴重な見解の示されてゐる論考の中で、失禮ながら管見から洩れてゐるものも少くないであらう。またことさらに論争の書を物する意圖はなかつたが、結果としてはそのやうに受けとられる點が書中にあるかも知れないのを憂へてゐる。大きな學恩を受けたことを深謝しながら、なほ見解を異にし、いくばくかの批判を加へる結果に立ち到つた諸説に對しては、出來るだけ繰り返し讀んでその眞意を探らうと努めた。それにもかかはらず、なほ意外の誤解に陥つてゐるところがあるかも知れない。特に脱稿を急いだあまり、第一、第二の章の構成適切を缺き、その中の私意による諸説の紹介的批判には、重複し、冗長の點が相當あつて、非禮の罪をことさらに重くしてゐる點もあるやうに思ふ。宥恕を敢へて乞ふ次第である。

この書の本文においては直接教へをうけた恩師を始めとして、故人たると現存の人たるを問はず先學に對する敬稱をすべて省略した。わが國では簡約を主とする辭典類を除いては、これは學界の慣習にまだなつてゐないので、異様

の感じがするかも知れない。外國の學術文献の本文においては概してこのやうな敬稱を用ゐない。(バセドー氏病などの譯語の存在は奇異の感じがするといはれてゐる。) また御指導、御助言はもとより、御論文、御説などの「御」の學術書の本文中における多用は、以前には今日程ではなかつたやうに思ふ。この點、見解の異なる場合のあることが考へられるが、敬稱を用ゐないことには他意のないことを諒察願ひたい。

書名については、最初源氏物語玄義あるいは探玄記などを考へたが、時好に合はざるをもつてそれを捨てた。新見と題する所以は、一つには源氏物語の研究、源氏物語構想論など類書との名稱の一致を避けた便宜的のものがある。しかしまた一つにはいささか新見と信ずるものを示して大方の批正を乞はんがためである。

前人いまだ言はざる説をもつて全冊を満すことはもとより不可能であるし、部分的に新見と自負するものがあつても、それにはなんらかの先蹤のあることはこの書の私案がそれを證明してゐるであらう。しかしながらいはゆる新説の歸趨に關していささか個人的の所懐がある。夕顔卷「おのがいとめでたしと見奉るをば……」の「をば」についてといふ私見を發表して以來、この書で述べた結論に達するまで、途中私案も幾度か動いて、三十年以上を經過してゐる。そしてこの岩城準太郎、門前の新解が學界で公に問題としてとり上げられるまでには實に二十年以上の長き歲月を要してゐる。桐壺の卷の「いとかく思ふ給へましかば……」の解釋について新説を發表したのは、五年前のことであつた。けれども學界からまだなんらの反響もない。古事記の「ミハカセル」といふ宣長の訓の非なることは早く三矢重松博士の指摘があり、わたくしも續貂の論を書いたが、二、三の例外を除いて、三矢、門前の新訓が公に認められるまでには、これもまた半世紀近くの年月を要してゐる。(わたくしはさらに「ミネマス」といふ訓はあり得ないし、萬葉集の「ミタタシマシテ」出雲國造神賀詞の「イヤワカエニミワカエマシ」などの訓に對しても同様にいかが

と思ふ否定論を發表したが、これはまだ大方の支持を受けずにゐる。平家物語の序章祇園精舎の段の解釋についても二年前私案を發表した。この新解は平家物語の主題のとりへ方に大きな影響を及すものと思ふ。この解釋を採れば、平家物語の構造を清盛、義仲、義經を中心人物として三部に分けるのは極めて便宜的なもので、決して平家物語の本格的の主題論としては認められないことが明らかになる。(いはゆる成立論的な源氏物語三部構成説もそれと同様のものである。第一部、第二部、第三部の主題を別々にとらへる前に、源氏物語論としては作品の全體的意味、特に第一部、第二部の共通主題を見出すべきである。)これに對してもほとんど反響がない。新説の受ける運命にはこのやうなこともあることはわたくしの場合に限られたわけではない。例へば昭和十年代の源氏物語成立論は直ちに學界の反響を呼ばず、それが問題になつたのは十年を経た戦後の事であつた。このやうに考へてわたくしは、單行の一本を公刊する稀なる機會が與へられたのを最大有効に利用して、この書の標題として、ことごとしく新見をえらんだ。これは類似の書名を避ける以上に、ことさらに世の耳目を驚かさんとしたともいへる。

とはいへ假にも新見といふにふさはしいものがこの書の中に果してあるだらうかと自ら愧ぢる。しかも敢へてそれに答へるならば、第四の章夕顔の巻のものけの正體論、第五の章浮舟還俗否定説においては、見解を異にする諸説を彼此折衷して、最後に新しく私案をもつてこれを斷じたつもりである。第三の章の「桐壺序ニ入りタタズ」や、品定總序説などの否定も舊稿以來のものであるが、構想論において古人の説といささか機軸を異にするものがあつたと思ふ。朝顔の姫君の初出を宇治の姫君の場合と對比して、主筋、脇筋の二つの世界の平行、いはゆる并びの巻的手法を問題としてとり上げたのも、また舊稿以來のことであつた。このやうな發想は後に別に發展させられて、いはゆる紫上系、玉鬘系の二系列を分つ成立論となつたともいへるのではなからうか。その他第一の章以來の藤壺事件、も

のまぎれを古來の説のやうに單なる伏線、醜化と見るだけにとどまらず、第一部冒頭部に特異の大省略を積極的に認めること（これは原源氏物語假定説、あるいはかがやく日の宮脱卷説の否定となる）、源氏物語全體の構造分析より考へて第一部を第二部への導入部として位置づけること、第一部のものは理論的な、また「めでたし、めでたし」の昔物語的なものよりは、むしろ作品の全體の意味としてはゆる一部大事論的な道徳的、また宗教的の主題を重視する點などにおいても、現在の學界の狀況、源氏物語論の主潮や關心の面から考へると、私見は相當異なるものがある。

作品の全體意味を重視して宗教的の主題を強調したこの書の論の基調は、部分的にはともかく、幾分時代離れのした古風なものとなつてゐる。それにもかかはらず敢へて新見といふのは、いささか愼矜の態度を缺くところがあるかも知れない。その罪は甘んじて受けるであらう。

日暮れて道遠し以上の感慨にある老書生が、源氏物語の中からおのが好むところにしたがつていくつかの問題をえらび出して、私見を吐露した。そのいはゆる一轍の論に對していろいろ批正を賜はるならば幸ひである。

一九六五年二月

著 者 識

目次

刊行のことば

題言數則

源氏物語論の方向

作品の全體的意味——一部大事論を中心にして 1

品定の女性論の具象化といふ説など 5

宣長のもののあはれ論と爲章、廣道の一部大事論、諷諭説 12

宿世の縁——多屋頼俊 27

源氏物語成立論その一——玉上琢彌 34

源氏物語成立論その二——武田宗俊 45

光源氏の道心——岡崎義恵 61

源氏物語における罪と應報の問題

源氏物語の全體的意味と宗教的のもの 78

源氏物語における罪、應報の問題 100

源氏物語の主題——宗教的救ひへの志向 113

帚木とその并び空蟬、夕顔の構造

——源氏物語冒頭部の大省略——

藤壺事件の醜化——かがやく日の宮脱卷があるか 129

帚木の卷朝顔の姫君初出の構想上の意味 144

舊稿の補訂、桐壺「序分マデモ入リタタズ」その他 156

夕顔の巻の構成と、もののけの正體

もののけ出現を中心とする夕顔の巻の構成 164

もののけの正體論の展開 183

源氏物語の全體的構想より見た六條御息所物語と
夕顔の巻のもののけの物語 220

宇治十帖の構成と浮舟の還俗問題

宇治十帖の主題と構成、その結末 242

僧都の手紙は浮舟に還俗を勸告してゐるか 258

僧都の手紙をめぐる主要人物の状況 272

佛教の救ひ——浮舟はいかに修行すべきか 288

宇治十帖の宗教的人間、薫、浮舟、横川僧都 308

補記 二つ

葵の巻「…人ひとりか、あまたしも見給ぬ…」
について——第一部の構想再説 327

源氏物語と天台佛教、また往生要集について
——諸法實相説 331

門前眞一著作論文目錄

略歴風のモノローグ

後記

索引

343

338

334

源氏物語論の方向

作品の全體的意味——一部大事論を中心にして

一つの作品がなんであるか、その全體としての美と意味がどんなものであるかをとらへることは作品論の爲事の中の最も重要な部分である。作品にはその部分的美があるとともに全體的美がある。同様に部分的意味のほかに全體的意味がある、そして部分なくして全體はないが、全體は單なる部分の總和ではない。源氏物語の全體的美はなんであらうか。全體的の意味はなにをあらはしてゐるであらうか。この書においてわたくしは源氏物語の作品としての全體的意味がなんであるかをとらへる爲事を試みて見ようと思ふ。そしてそれは源氏物語の全體の藝術的の價值、美の問題を明らかにすること

の土臺になつて役立つであらう。

源氏物語は最初婦女子の娯樂また教養としての讀物であつたが、一方において男子の學者の手に渡つていろいろ研究の對象となつたやうである。早く系圖や簡單な年立が作製されたことなどから考へると、短篇的にバラ／＼に讀むのではなく長篇作品として全體的のものをとらへること、作品の構造を分析することがすでに行はれてゐたことも明らかである。並びの卷の説のあることは長篇物語として主筋、脇筋を區別し、後者を前者に附屬包攝せられるものとして一まとめにして處理するやうな漢學者風の作品の分析さへ試みられてゐたことを示す。しかし源氏物語の全體的の意味がなにをあらはしてゐるかといふ問題に對する彼らの解答がどんなものであつたかはそれをはつきり確めることが出来ない。程度の高いすぐれた鑑賞も實際に行はれたかも知れないが、今日ではすべてそれは姿を消して傳はつてゐないといへよう。

源氏物語が佛教的な人生觀を背後に藏した作品であるといふことは古くよりいはれてゐた。けれども、それは源氏物語一部五十四卷が天台法門の理をあらはすとか、あるいは帚木、夢の浮橋や雲隱などの卷名が人生の實相を示してゐるとかいふ類であつた。またそれ以外に莊子による寓言説も見えてゐるやうである。源氏物語の五十四卷の卷數も、六十、二十八、三十九などの數が考へられていろいろ附會の説が行はれた。これは原作者の全然あづかり知らないことであらうか。源氏物語の卷々の分

冊は内容その他いろいろの事情によるもので最初から全體の卷數を豫定して書いたものでは恐らくないからう。ただ五十いくつといふ數字は人間が修行を積んで最高の悟りの境地、等覺とか妙覺に至る長い道程の途中の段階の數とよく似た數に偶然ではあるが一致してゐる。ともかくこれらのことから初期源氏物語享受もしくは研究の態度の一斑を知ることが出来る。また佛教的立場から作者は佛教に背く書物を書いた罪で地獄に墮ちたといふ考へも別にあつた。

作品の内容をいまだ少し具體的にとらへて源氏物語を教誡的婦人觀を基にした戀愛物語として見る立場もあらはれた。男女好色のことを物語る背後には政治的な面に對する諷諭もあるやうにもうけとられたであらう。藤壺事件、もののまぎれの第二部以後への展開を辿るものは應報、その救ひとしての現世離脱、出家などの宗教的主題をよみとつたであらう。しかしこの問題に關する論議の内容もほとんど傳はつてゐないやうである。

安藤爲章は紫家七論に作者本意、一部大事を説いた。爲章は七論の中の正傳説誤においては古來よりの儒佛の立場からの附會説を斥けてゐる。それにもかかはらず自身はやはり儒教的の感じのする諷諭説を唱へてゐる。源氏物語論において儒佛の附會説をほとんど徹底的に斥けてゐる本居宣長の玉の小櫛は爲章の一部大事論を強く否定してゐる。萩原廣道は源氏物語評釋に爲章、宣長の論をうけて自説を述べてゐる。廣道は宣長のもののあはれ論を肯定し激賞しながらなほ爲章、宣長の論を批判する

に當つては爲章の一部大事論を支持してゐる。わたくしはこの廣道の見解を意味あることと思ふ。勿論爲章の一部大事論をそのまま認めるわけにはゆかない。一部大事論は儒教的の諷諭説を主張してゐる。この點だけを問題にするならば宜長のもののはれ論の正しくすぐれてゐることはいふまでもないであらう。しかし一部大事論はつぎの點に意味をもつてゐると思ふ。一部大事といふのは具體的にいへば藤壺事件、もののまぎれをいふ。爲章はそれを諷諭説の立場から一部大事としてとり上げた。それに對しては批判が加へられるであらう。けれども爲章のとり上げた一部大事はそれから諷諭説をぬきにして構想論の立場から問題にすることが出来るのである。一部大事、藤壺事件、もののまぎれは源氏物語全體の構想の中でどんな意味をもつてゐるかといふことが問題になるのである。爲章がそれをどう考へてゐたかはその論からはあまり分らない。しかし宜長が爲章の説を反駁するために一部大事を問題にする時は、もののあはれ論の立場から離れて一部大事の源氏物語に對する意味について何度か言及してゐる。その宜長の一部大事に對する考へは作品の構想論から見ると必ずしも正鵠を得てゐると思はれない。廣道は宜長説をその點から批判してゐる。廣道の立場ではもののはれ論と一部大事論は二者擇一的に兩立し得ないものではない。廣道はまた諷諭説を徹底的に斥けてゐない。作品が結果的に諷諭になるといふことだけではなく、藝術的の表現なるが故に諷諭的な婉曲表現があると考へてゐる。爲章の一部大事論は廣道の論によつて修正されて、最初の露骨な儒教的諷諭説そのま